

『96歳 元海軍兵の「遺言」』

2018年05月12日

昨年の12月に吉田裕氏が、幕僚将校たちが分析した戦史ではなく、兵士たちが体験した戦場現場の視点から、『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』を著している。私が読んだのは「4版」であるが、4月10日のトーハン調べのベストセラーでは2位にランクされている。今年の2月に、朝日新聞出版から『96歳 元海軍兵の「遺言」』が出版されている。海軍兵になった瀧本邦慶氏（96歳）が戦争の現場を生き抜いてきた事実を語り、朝日新聞記者の下地毅氏が聞き書きし、資料・記録と照らし合わせ1冊の本にまとめたものである。このような本が読まれているのかと驚くと同時に、今の時代に意味があると思っている。兵士たちの戦争体験は多くの著作になり、映像で観ることもしばしばある。私は「中国帰還者連絡会」の人々の証言を読んで、衝撃を受けた。彼らは中国戦線で鬼と化し、傍若無人の虐殺と強姦を繰り返していた。撫順の戦犯管理所で人間的な扱いを受ける中、自分たちの犯した事実に向き合い、人間の心を取り戻し、身もたえしながら罪責を告白する。鬼が人間に回復した奇跡である。彼らは、赦され帰国し、戦争がどんなに非人間的なものであるかを証言し続けている。亡くなられ、また、高齢になられ、今は「撫順の奇跡を伝える会」として活動を続けている。

瀧本氏は子どもの頃から、国のため、天皇のために死んで靖国神社に祀られ、神となることを至上の価値とする中で育った。「『一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ』これですわ」と語っている。二十歳の徴兵検査を待てず、17歳で志願し、最下級の四等水兵になる。佐世保で新兵訓練を受け、上官の命は天皇の命と、古参兵からのリンチに耐えながら、飛行機の整備兵になる。

航空母艦「飛龍」の乗組員になり、1941年12月、真珠湾攻撃に向かう。1942年6月、ミッドウェー海戦に従軍する。地獄の戦闘を経験し、自らも傷を負う。作戦の失敗で、米軍機の猛攻を受け、その後の戦局を決定的に変える敗北を喫す。瀧本氏は九死に一生を得るが、ミッドウェー海戦の敗北を隠蔽するためか、生き残った兵士たちは南方のトラック諸島に送られる。兵站が断たれ、米軍に反撃する武器もなく、ただ逃げ惑い、食料がなく、餓死者が続出する。日本軍人の230万人が「戦死」したが、6割の140万人は餓死であった。「餓死いうたら生き地獄です。これほどくるしい死はないと思います。

（中略）下っぱは虫けらといっしょやと見ている。餓死の5分前まで行ったわたしはそう確信しております」と語っている。そして、敗戦を迎え、帰国する。戦後、職業を転々としながら、生活を立て直していく。瀧本氏の戦中、戦後のタフさに感嘆する。

2008年から戦争の語り部活動を始める。語り部を始めた理由は、まず「国に騙された」という意識である。「お国のためやというてね。天皇のためやというてね。それはまちがいやった。だまされておった。」上の政治家や官僚たちは責任を取らない、下の者たちが犠牲を強いられる社会構造に激しく怒っている。そして、戦火を生き残った者は、犬死させられた戦友に代わって、戦争の惨さを伝え、決して戦争を起こしてはならないと言う使命感である。靖国神社は国民を洗脳するための道具で、無意味、反対である。「『なにが天皇じゃ』ということですよ。あの戦争の一番の責任者は天皇じゃないですか」と語る。「戦争にならんためにどうすればいいのか。（中略）とにかく『わたしは反対や』と大きな声を出しつづけなければあかんと言いますねん」と、時流に流されず、意思表示することを力説している。沈黙することは、権力に与する結果になるというのが死ぬ前に伝えたい瀧本氏の「遺言」である。